

第23回
徳島透析療法研究会
プログラム・抄録集

会 期：平成4年8月2日(日)
会 場：徳島パークホテル
主 催：徳島透析療法研究会
会 長：渡辺恒明

プログラム

1. 徳島透析療法研究会の経過報告..... 303
小松島赤十字病院 渡辺恒明
2. 長期透析患者の生活の状況と指導..... 303
小松島赤十字病院 腎センター 加地 環 他
3. 当院透析患者における食事調査について..... 304
健康保険鳴門病院 透析室 中本豊子 他
4. 高リン血症予防の食事指導を試みて
－アンケート調査に基づいたパンフレットの活用－..... 304
宮本千恵美 他
5. 透析患者に対する外科手術症例の検討..... 305
J A 徳島厚生連阿波病院 近藤隆昭 他
6. 心内膜下梗塞を併発した透析患者における t-PA の投与効果..... 305
田蔭病院 田蔭正治 他
7. 二次性副甲状腺機能亢進症に対する 1,25(OH)₂D₃ 経口パルス療法の検討..... 306
川島病院 田中幸子 他
8. 改良型 EVAL 膜ダイアライザー (EVAL-CH) による
アミロイド骨関節痛の治療効果..... 306
川島病院 播 一夫 他
9. EPO 投与症例の集計報告 (多施設共同研究) 307
小松島赤十字病院 須見高尚 他
10. 徳島県腎移植推進情報センターの集計報告..... 307
小松島赤十字病院 腎センター 長田浩彰 他

11. 徳島県の透析の現況..... 308
小松島赤十字病院 渡辺恒明 他
12. CAPD 患者におけるテココフカテーテル抜去症例の検討..... 308
小松島赤十字病院 外科 泉 純子 他
13. CAPD から HD へ移行した80歳以上高齢透析患者の看護について..... 309
岩浅病院 橋本洋一 他
14. 寝たきり高齢 CAPD 患者に APD を試みて..... 309
川島病院 日浦直美 他

1. 徳島透析療法研究会の経過報告

小松島赤十字病院
渡辺恒明

昭和44年に徳島大学で人工腎臓が設置されて、慢性透析は昭和46年から小松島赤十字病院で行われ、現在29施設が透析療法を行い、他に計画中の施設がある。夜間透析は半数の15施設である。20年を越えた生存者がでて、長期生存による合併症対策が課題となっている。

日本透析療法学会の集計によれば人口百万対比で徳島県は昭和62年以来日本一の数字となっている。その原因を追及するとともに生存率の上昇や患者の生活の質的向上に努力しなければならない。

現在の透析患者のうち登録されている移植希望者は73名で、この他に登録していない移植希望者がかなりあり、本県は死体腎の提供がほとんどなく、移植希望者にどう対応するかが今後の課題である。

徳島県腎臓病患者連絡協議会と徳島腎移植の会の2つの患者会の診療側に対する要望を紹介した。

2. 長期透析患者の生活の状況と指導

小松島赤十字病院 腎センター
○加地 環、尾嶋美恵、一宮智子
内藤由美、久米宏実、新田高子
大西美子

当院における透析導入者の15年以上の生存率は、昭和46年以降36.4%で、消息を追跡調査した結果31名中22名が転医し、残り9名中8名が当院にて治療を続行している。8名とも導入時年齢は、平均30.4才と若く、現在の年齢でも平均47.4才であった。

15年以上の長期透析患者は、長い間の経験から、自分なりに透析を理解し、自分の勘、自己判断にて、自己管理が十分できており、社会復帰や生活状況は良好な事がわかった。

これから長期になるにしたがい、合併症は増加傾向にあり、合併症の重複と加齢によって、社会復帰を妨げる原因になると思われる。また時々の自己管理のチェック目的で、合併症の予防と対策、検査成績の目標値と読み方を中心にした長期患者専用パンフレットを作成し、個性をふまえて再指導した。その結果、長期透析患者が、自己管理を再調整でき、QOLが向上し、効果を上げることができた。

3. 当院透析患者における食事調査について

健康保険鳴門病院 透析室

○中本豊子、谷 知子、浜田公子
同・栄養課

矢野美恵子、喜多早苗、浜口静子

全身状態を良好に維持し、社会復帰するためには、基本的な食事療法を守ることが大切である。

そこで、当院で継続的に行われている食事調査表を分析してみた。その結果

①各年齢層において、エネルギー摂取量はほぼ満足できている。

②若年齢層ほど、塩分、カリウムの摂取が多い。

③家庭に子供のいるケースでは、子供中心の献立がなされている。

以上のことから、患者を取り巻く環境により差異が認められるので、今後は患者のみならず、家族を含めた頻回な指導を行っていきたい。

4. 高リン血症予防の食事指導を試みて

—アンケート調査に基づいたパンフレットの活用—

阿南共栄病院

○宮本千恵美、横手照美、北島節子
飯盛さち子、三宮建治

〔目的〕長期透析者の骨・関節障害、循環器障害は、多くの場合、高リン（P）血症が関与しているため、当院透析者68名にPに対する意識調査を行なった。

〔結果〕アンケートの結果、血清P値を知っていたのは12%；P含有量の多い食品をよく理解していたのは26%と認識が低かった。骨代謝障害は、症状が出現してからの対応では遅く、予防の必要性を感じ、パンフレットを作成した。これには、Pの吸収と排、P結合薬の必要性、高P血症による合併症、主な食品のP含有量を絵で示した。パンフレットを基に指導し、血清P値や食事に関する意識を高めることができた。

〔まとめ〕繰り返す説明や指導により、血清P値に改善がみられた。又、信頼関係をより深めることもできた。透析者の食事指導、服薬指導、検査値の把握は合併症の予防に重要である。尚、症例に応じた低P食の献立導入は、今後の課題である。

5. 透析患者に対する外科手術症例の検討

J A徳島厚生連 阿波病院
○近藤隆昭、増田寿志、山下恭治

透析療法の発達に伴う透析患者の増加と長期化は、併存症や合併症を呈する患者を増加させることにもなって外科的手術がますます必要となってきた。今回我々は阿波病院で過去10年間に透析患者に対して行った257手術症例の実態を調査し、特に悪性腫瘍手術症例について検討したので報告した。また非同期に発生した両側腎癌のために両側腎摘除を行って血液透析導入したまれな1症例についてもあわせて報告した。

悪性腫瘍手術症例の透析歴はいずれも3年以下と短かく、悪性腫瘍は透析歴とは関係なく発生するものと思われたが、導入時にすでに発生していたと考えられる症例もあり、導入時に悪性腫瘍の検索を徹底的にやるべきであると判断した。

6. 心内膜下梗塞を併発した透析患者におけるt-PAの投与効果

田蒔病院
○田蒔正治、戸田則之、和田美智子
香川宜子、藤井浩三、佐野秀樹
石田ゆうき、梅本恵美、川島有理
妹尾和代

症例64才男性。主訴透析後の胸痛、心源性ショック。家族歴、既往歴に高血圧、虚血性心疾患有り。平成2年11月に狭心症発作にて徳大病院でCoAG検査し左右冠状動脈に多発性高度狭窄を認め、本年1月小松島日赤病院でPTCA治療を2回受ける。3月中旬心不全、腎機能障害悪化し4月25日より血液透析導入し、5月当院転医。転医後一回目のHDより透析器内の残血有り。次第に進行。6月3日外来2回の透析終了後、突然心内膜下梗塞併発し心源性ショックに陥る。意識消失、血圧測定不能にて種々の救急蘇生行ない、又発作後約1.5hrよりt-PA2400万単位投与し奇蹟的に回復する。入院時より下痢の持続、ヘパリン透析で透析器内の凝血等から凝固亢進状態を認め、高度冠状動脈狭窄と相まってAMIの発症となる。発作後の抗凝固剤にフサン使用し凝血認めず。ヘパリン、EDTA採血いづれも血小板数の有意差なし。今後ヘパリン依存性抗凝固因子の検索予定。

7. 二次性副甲状腺機能亢進症に対する $1.25(\text{OH})_2\text{D}_3$ 経口パルス療法 の検討

川島病院

○田中幸子、水口 隆、曾根佳世子
水口 潤、河内 護、川島 周

【目的】透析（HD）患者の二次性副甲状腺機能亢進症（Ⅱ° HPT）に対する $1.25(\text{OH})_2\text{D}_3$ 剤による経口パルス療法について検討した。

【対象・方法】HS-PTHが 25000pg/ml 以上を示したⅡ° HPTを合併した51例のHD患者を対象に $1.25(\text{OH})_2\text{D}_3$ $2\sim 4\mu\text{g/day}$ を週2回透析後に服用させた。HS-PTH、ALP、Ca、P、骨X-P(MD法)の推移を観察し、ALPが正常化した症例では維持療法を行なって、再発の有無に関し検討した。

【成績】51例中24例で、ALPは正常化し、HS-PTHは低下した。しかし、ALP、HS-PTH共に再上昇しなかったものは7例、HS-PTHのみ再上昇したものは17例であった。又、他の22例では、パルス療法の再開が必要であった。さらに、5例は無効であり、うち3例はPTXを施行した。

【結論】Ⅱ° HPTに対し $1.25(\text{OH})_2\text{D}_3$ 剤によるパルス療法は多くの症例において有効であった。

8. 改良型 EVAL 膜ダイアライザー (EVAL-CH) によるアミロイド骨関節痛の治療効果

川島病院

○播 一夫、増尾浩司、水口正幸
水口 潤、川島 周

各種のハイパフォーマンス・メンブレン（HP膜）の使用経験より、透析アミロイドーシスによる骨関節痛の発現には、 $\beta_2\text{MG}$ よりも分子量の大きい領域の物質が関与していることが考えられる。今回、分子量 $2\sim 3$ 万以上の物質の除去能に優れた EVAL-CH を、長期血液透析患者にみられる骨関節痛の治療に使用し臨床評価を行った。

従来の HP 膜を使用しているにもかかわらず、骨関節痛を訴える14症例を対象として EVAL-CH 1.5m^2 を使用した血液透析を行った。

治療を開始して $2\sim 8$ 週間後に、14症例のうち11症例で骨関節痛の改善がみられた。小分子量領域の変化を SDS・PAGE でみると、有効例では治療前に認められた 18KDa 、 25KDa 付近の band が、1ヶ月間の治療により消失した。また、3ヶ月間の観察では総蛋白値の有意な低下がみられた。EVAL-CH 膜は、従来の HP 膜では消失しない骨関節痛に対し有効であると考えられる。

9. EPO 投与症例の集計報告 (多施設共同研究)

小松島赤十字病院

○須見高尚、渡辺恒明

川島病院

川島 周

阿波病院

近藤隆昭

阿南共栄病院

三宮建治

鳴門健保病院

新野秀樹

玉真病院

玉真捷二

小倉診療所

小倉邦博

血液透析患者の貧血改善に使用するr-HuEPOの有効性と維持量及び副作用の発現についての検討を行った。週2～3回の維持血液透析を受けている患者でHt値が25%未満の16才以上を対象としr-HuEPO 3000IU週2回投与を原則としHt値30%を目標とした。Ht値の増減により投与量も変えることとし6ヶ月間観察した。対象症例は男性50例・女性51例の計101例で、平均年齢は51.46才であった。副作用は12例に14件起こり、発現率は11.9%であった。症状は血圧上昇9例・頭痛4例・湿疹1例であった。Htが5%以上上昇した著効例、70.1%・3%以上5%未満の有効例、21.7%、合計91.8%の満足度が得られた。初期投与量を1500・3000・4500・6000IUの群に分けると、何れの群でも12週位でピークに達しているが1500・3000IUの群では目標値の30%に達することができず4500・6000IUの群では30%に到達し、維持できた。

10. 徳島県腎移植推進情報センター の集計報告

小松島赤十字病院 腎センター

○長田浩彰、渡辺恒明、榊 芳和

阪田章聖

平成4年2月、徳島県腎移植推進情報センターが本院に開設され業務を開始した。

現在登録されている死体腎移植希望者と徳島県腎臓バンクに登録されている提供登録者のデータを報告する。移植希望登録者は、平成4年7月現在男性40人、女性33人、総数73人、提供登録者は、平成4年6月現在男性331人、女性329人、総数660人である。移植希望者の血液型は、A型34人、O型16人、B型15人、AB型8人、提供登録者は、A型251人、O型157人、B型149人、AB型77人、不明26人である。年齢別では、移植希望者は、10代0、20代6人、30代14人、40代43人、50代5人、60代以上5人、提供登録者は、10代23人、20代232人、40代133人、50代86人、60代以上41人、不明2人である。現在の提供登録者は、徳島県の人口の0.08%にすぎず、腎移植推進のためには、透析患者や透析医療従事者が積極的に推進活動に参加し、一般の人々に腎移植を正しく理解してもらうことが課題である。

11. 徳島県の透析の現況

小松島赤十字病院

○渡辺恒明

川島病院

阿波病院

国立東徳島病院

阿南共栄病院

赤沢病院

玉真病院

川島 周

近藤隆昭

喜多青三

三宮建治

赤沢泰秀

玉真捷二

平成2年7月の透析患者総数は1,069で、遂に千人を越え、人口百万(827,392人)対比にすると1,292になる。血液透析の965人に対し、CAPDは104人でほぼ10%と著じるしく増加している。腎臓移植患者は25名で、他府県に比べ少なく、移植が少ないことが徳島の患者数の多さの一因になっている。

徳島県の患者数について日本透析療法学会の集計は昭和50年代までは徳島県透析療法研究会の集計よりも少なかったが、昭和60年からは両集計は一致するようになり、徳島県の全施設が正確に報告しているものと思われ、これも患者数の多い原因と考えられる。

日本透析療法学会の平成2年の生存率を見ると徳島県は1年から7年まで全て全国平均よりは、わずかに良い程度で生存率が良いから患者が多いとは言えない。透析歴も長期例が有意に多いとは思えない。導入患者の平均年齢は全国最低年齢となっている。現在透析者の平均年齢は低い方から6番目である。

12. CAPD患者におけるテンコフカテーテル抜去症例の検討

小松島赤十字病院外科

○泉 純子、渡辺恒明、阪田章聖

榊 芳和、木村 秀、須見高尚

増田栄太郎

テンコフカテーテル留置術を施行した症例は、この10年間に101症例であり、我々が、継続して経過観察し得たCAPD患者58例におけるカテーテル抜去症例につき検討した。

腹膜炎によるものが7症例9回であり、真菌性腹膜炎3回、難治性腹膜炎5回、頻回に腹膜炎を来したものの1回であり、血液透析に変更したものは真菌性腹膜炎、好酸球性腹膜炎、頻回に腹膜炎を来した5例であった。出口部感染で第2カフ切除、開放術にて治癒傾向を示さないトンネル感染では、全例カテーテルを抜去したが、2週後再留置し、CAPDを継続した。カテーテルの位置異常や閉塞による排液不良例は4例で、早期に再留置した。小児例では、カテーテル留置時にテンネラーによる腹壁損傷1回、カテーテル先端による腹壁穿破が1回あり、対側に再留置した。腹膜炎による除水不良1例、透析不十分1例、腹膜炎を拒否した1例では、カテーテルを抜去し、血液透析へ移行した。

13. CAPD から HD へ移行した80歳以上高齢透析患者の看護について

岩浅病院

○橋本洋一、滝根富美子、中田玲子
斎藤隆司

腹膜炎を併発し CAPD から HD へ移行した 80 歳をこえる高齢透析患者の看護を通じて、その治療の違いを検討し、看護計画をたて実施しました。HD は CAPD と比較して治療時の侵襲性、拘束感も大きく、それが高齢患者の HD への適応を困難にする要因の一部となっていました。HD 回数、時間に融通性をもたせ、治療中のコミュニケーションを充分に行なうことにより軽減し、また治療時以外の栄養管理のなかで障害となってきた高齢患者が陥りやすい食欲減退についてもできるだけ患者が摂食意欲を失わないように可能な限り食事管理を緩やかにすることによって良好な経過を得ており、今後継続して患者を観察し、増加するであろう高齢患者の看護の一つの指針にしたいと思います。

14. 寝たきり高齢 CAPD 患者に APD を試みて

川島病院

○日浦直美、藤井優子、河井洋子
大坪賀名、木村貞子、真鍋恵美子
福島広江

自己交換ができない寝たきりの高齢 CAPD 患者に、日常生活動作の改善、看護者への負担軽減の目的で、サイクラー使用を試みた。

症例は 77 歳の女性、多発性関節リウマチにより四肢拘縮、変形をきたし寝たきり状態となった。その後 1991 年 6 月頃より慢性腎不全のため、腹膜透析を開始した。満腹感や腹痛軽減の目的でサイクラー使用による注液量、排液時間、サイクル数の設定変更を 3 つのパターンで行い、症状及び、透析効率の変化について観察を行った。

夜間の使用が試みられず、日常生活動作の改善は充分に行えなかったが、看護者への負担は少なくなった。透析効率には大差はなく、1100 ml の 6 回交換により、今までの CAPD での苦痛より開放された。本来サイクラーは主として、自己管理可能な CAPD 患者の社会復帰を目的として使用されるが、今後増えつつある高齢化社会への一対応策としても有用であると思われる。